

## 幼児の自己制御機能の発達研究

A developmental study of self-regulation in preschool children

森下 正康

MORISHITA Masayasu

## 幼児の自己制御機能の発達研究

A developmental study of self-regulation in preschool children

森下 正康

MORISHITA Masayasu

(和歌山大学教育学部)

### 要 約

本論文は最近おこなってきた一連の研究をまとめたものである。ここで扱った研究テーマは次の4点であった。(1) 自己制御の発達について横断的データと縦断的データから同じ結論が得られるか。(2) 子どもの自己制御の特徴は家庭と園で一致するかどうか。それが一致する子どもと一致しない子どもの親子関係の特徴を探り、自己制御の発達にどのような影響を与えるかを検討する。(3) 母と子、父と子という二者関係ではなく、母父子という三者関係のパターンが子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるか。(4) 園の教育(保育)目標や保育者の保育行動の特徴が子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与えるか。幼稚園や保育園の園児の母親や父親、保育者の協力によって、子どもの自己制御(自己抑制、自己主張)、養護性、攻撃性、親の養育態度、保育特徴について489組のデータを得た。

結果を要約すると次のようになる。(1) 自己制御の発達に関する横断的データと縦断的データの結果は異なっていた。改めて縦断的研究の重要性が示唆された。(2) 家庭と園での自己抑制や自己主張の特徴は必ずしも一致しないという結果であった。その率は年齢や特性によって異なっているが、一致する者約60%、一致しない者約40%であった。家庭でも園でも自己抑制の高い子どもの父母は共に受容的であったのに対して、自己抑制の低い子どもの父母は共に拒否的であった。また家庭でも園でも自己主張の強い男子の母親は矛盾が少なく、その反対に自己主張の弱い男子の母親は矛盾が多かった。(3) 父母共に受容的な場合、女子は自己抑制が高かった。父母共に拒否的な場合、男女ともに攻撃性が高かった。また、母親の統制が強く父親の統制が弱い場合、男子は強い自己主張と強い攻撃性を示し、女子も強い攻撃性を示していた。(4) 保育特徴が園での子どもの行動特徴に影響している可能性があった。つまり安全・過程重視、協調性・思いやり重視の保育特徴は自己抑制や養護性を育て、攻撃性を抑制する。冒険やたくましさを重視した保育特徴や、生活体験や子ども主導を非常に重視した保育特徴は子どもの自己抑制を開放し、攻撃性を表出させる可能性があった。このような研究を通じて親子関係や保育環境の子どもの自己制御に対する影響について考察し、残された課題について言及した。

**キーワード：**自己制御、自己抑制、自己主張、養護性、攻撃性、親子関係、保育特徴、縦断研究

本論文は、幼児期の自己制御等の発達に関する最近の一連の研究(森下、2000a、2000b、2001、2002a、2002b、2003)をまとめたものである。

### 1. 自己制御機能研究の意義

#### 自己制御機能の意味

新しい時代を生きるために何が必要か。それは豊かな知性や体力、人間関係を結ぶ社会性の能力と共に、自分の感情や行動を抑制したり表現したりする自己制御(self-regulation)機能である。子どもの生きる力の中核に自立心があり、そこに深く関与する自己制御機能の発達は、外的統制によって行動を制御する段階から、自らの意志によって行動を制御する段階への

移行である。自分の課題や夢を実現するためには、目の前の欲望や衝動を抑えつつ目標に向かって努力していく力が必要であり、強い自我が育っていなければならない(森下、1998)。今日のいじめや学級崩壊、不登校などの問題の背景には、この自己制御機能の発達の問題が関与している。

Bandura(1971、1977)によれば、自己制御は自分の行動を強めたり弱めたり、維持したりして行動を調整する過程をさす。人間の行動制御は誘発刺激と反応結果だけでは十分に説明できず、ほとんどの外的要因は

認知過程を介して行動に影響すると Bandura はいう。例えば、将来の予想を心のなかで表象する、それが現在の行動を動機づける要因として働く。このようなイメージや概念による経験の表象や思考過程が行動の制御にかかわっているが、これを彼は認知的制御と呼んでいる。この点は自己制御のメカニズムや発達を考える際の重要なポイントである。

従来、自己制御と同じような概念として、セルフコントロール (self-control) という用語が用いられてきた (石田、1986；春木、1986；庄司、1996)。その用語の与える印象や研究の力点は、自己の欲望や衝動を抑える機能におかれているように思われる。しかし、今日、子どもたちがたくましく生きていくために、必要に応じて自己を抑制すると共に、積極的に自己を表現し、能動的に人にかかわっていくことが求められる。

柏木 (1986) によれば、自己制御は、社会的場面において自分の欲求や行動を抑制・制止しなければならないときにそれができること (自己抑制) と、自分の欲求や意志を明確にもってそれを主張し、他者や集団のなかで協動的に表現すること (自己主張) の2側面からなる。柏木 (1988) は幼稚園場面における担任教師の観察や評定の分析を通じて、自己抑制については「遅延可能性」「制止・ルールへの従順」「フラストレーション耐性」「持続的対処・根気」の4因子を、自己主張については「遊びへの積極的参加」「独自性・能動性」「拒否・強い自己主張」の3因子を見出している。

矢川 (1999) は、教師や児童を対象とした二つの予備調査および柏木の研究 (1988) を基に児童用質問紙を作成した。小学校2, 4, 6年生を対象として因子分析を繰り返しながら項目を整理し、最終的に自己主張2因子 (「社会的積極性」「正当な要求」)、自己抑制2因子 (「協調性・持続性」「自立的忍耐」) を得た。

森下 (2000b) によれば、幼稚園の年長児では、自己抑制と自己主張が共に高い群は他の群に比較して思いやり得点が一番高く、攻撃得点が低かった。このように、自己制御は思いやり行動や攻撃行動の根底で機能しており、自己抑制機能と自己主張機能が共にバランスよく発達することが自己制御機能の発達だと考えることができる。

### 自己制御の発達

3歳から6歳までの園児を対象とした柏木 (1988) によれば、担任教師による評定の結果、男女共に年齢の上昇に伴って自己抑制 (4因子とも) が増加すること、一貫して女子の方が男子よりも自己抑制が高いことが示された。それに対して、自己主張 (実現) は3歳から4歳5ヶ月までは急激な上昇を示すが、それ以後は変化に一貫性がなく、ほぼ同一水準を示していた。また、自己主張の性差について、4歳前後ではいずれ

の因子も女子の方が男子よりも得点が高いこと、遊びへの参加因子では4歳11ヶ月以後は女子の方が得点が高いことが特徴であった。

児童の自己統制に関して、教師評定についての塚本 (1988) の研究では、「行動的・対人的自己統制」と「認知的・個人的自己統制」の2因子が見出され、いずれの因子も学年がすすむにつれて自己統制が増加すること、どの年齢でも女子の方が自己統制が高いという結果であった。それに対して、児童の評定を分析した庄司 (1996) の研究では、セルフコントロールは女子の方が得点が高いという点では塚本の結果と一致していたが、学年と共に低下するという点では異なっていた。同じく、小学校2, 4, 6年生を対象とした矢川 (1999) の結果では、自己抑制の2因子はいずれの学年でも女子の方が得点が高いという点では上記と一致していたが、自己抑制の「協調性・持続性」因子は4, 6年生の方が2年生よりも得点が低く、「自立的忍耐」因子は学年がすすむと共に明確に得点が低下していた。自己主張の因子についても同じような傾向が見られ、二つの因子はいずれも学年の上昇と共に得点が低下していた。以上の結果は単に子どもたちの自己評定の特徴ばかりでなく、今日の子どものたちに関する教師の観察とも一致していると矢川は指摘している。

### 親子関係と自己制御の発達

親の養育態度の主要な次元として、愛情に関する次元 (受容-拒否) と行動の統制 (統制-自律性尊重) に関する次元が考えられてきた (森下、1991b)。主として行動の統制に関する次元にかかわると考えられる介入・過保護に関しては、それは自己抑制や自己主張の両方の発達にマイナスの影響を与えると指摘されている (柏木、1988)。親の介入・過保護が強ければ、子どもの幅広い経験を制限すると共に、主体的に判断し自主的に行動する態度や行動を育てない、そのことが自己制御行動の発達にマイナスの影響を与えると考えられる。

そのような文脈でとらえると、Hoffman (1963, 1970) の指摘する養育ストラテジーのなかで、命令や脅しを中心とする力中心ストラテジー (power-assertive strategy) は、自己制御の発達に対してマイナスの影響を与え、説明を与えながら自ら考えさせる誘導的ストラテジー (inductive strategy) や犠牲者の苦しさに焦点を当てさせる犠牲者中心ストラテジー (victim-centered strategy) は、プラスの影響を与えると予想される。特に、子どもの気持ちや自我に訴えるしつけスタイルは日本の特徴 (小嶋、1986, 1987；東、1994) であり、誘導的ストラテジーと共通しており、子どもの自己制御、特に自己抑制の発達に大きな影響をおよぼすのではないかと考えられる。

## 2. 研究の視点と方法

### 研究の課題

これまであまり研究されていない課題でかつ重要なものが4点あげられる。

- ・自己制御の発達について横断的データと縦断的データから同じ結論が得られるか。従来の研究結果はほとんど横断的データに基づいている。

- ・子どもの自己制御の特徴は家庭と園で一致するかどうか。行動が場面によって一致する子どもと異なる子どもがいるだろう。そのような子どもにはどのような特徴があるのか。養護性（思いやり）と攻撃性に焦点を当て、それらとの関連を検討するなかで、より基本的な行動次元としての自己制御機能が、より具体的に明らかにされると考えた。さらにそのような子どもの親子関係の特徴を探り、自己制御の発達にどのような影響を与えるかを検討する。

- ・母と子、父子という二者関係ではなく、母父子という三者関係のパターンが子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるか。

- ・園の教育（保育）目標や保育者の保育行動は園によって異なっているだろう。そのような保育目標や保育行動の特徴が子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与えるか。

### 研究の方法

1) 手続き 和歌山県下の幼稚園と保育園合わせて5園、759名の幼児を研究の対象とした。母親と父親に対して家庭での子どもの特徴（自己抑制、自己主張、養護性（思いやり）、攻撃性）に関して評定を求めた。さらに母親と父親に対して、親子関係（受容、統制、矛盾、実権）について自己評定を求めた。また各園児の担任に対して、子どもの園での特徴について評定を求めた。保護者や園の先生方の協力の下に90%以上のデータが回収された。そのうち母親・父親・保育者のすべてのデータがそろったのは489組であった。

1回目の調査から約半年後2回目の調査を行った。2回目調査は子どもの特徴についてのみ担任、母親、父親に対して評定を求めた。さらに保育者に対して保育行動について梶田ほか（1985）の作成した質問紙への評定を求めた。この質問紙は51の対になった項目（6件法）からなっている。

2) 調査時期：第1回目2000年7-8月。第2回目2001年2-3月。

3) 尺度：子どもの特性について、自己抑制・自己主張・攻撃性については森下（2001a, 200b, 2001）に示している。養護性（思いやり）に関しては小嶋ほか（1988）の研究をもとに作成した。親の評定に関しては3件法（はい・？・いいえ）を用いた。担任による評定には、自己抑制と自己主張に関しては4件法（3

非常にそうだ・2かなりそうだ・1ややそうだ・0ちがう）、養護性と攻撃性に関しては5件法（4非常によくある・3よくある・2ときどきある・1たまにある・0ない）を用いた（森下、2001）。

親の養育態度については、小嶋ほか（1988）の作成した受容尺度（10項目）、統制尺度（10項目）、実権尺度の一部（5項目）と、鈴木ほか（1985）の作成した矛盾尺度の一部（5項目）を用いた（森下、2001）。この養育態度は子どもに向けた親の一方的な態度というよりは親子の相互作用の中で形成されたもので親子関係を反映している。

子どもの特性 ①自己抑制：つらくても我慢するという「我慢」の因子と、やりだしたら最後までがんばるといふ「頑張り」の因子の二つからなっている。14項目。②自己主張：自己表現力といかえてもいいもので、正しいと思うことは人の前で話すことができ、いやだと思ふことは拒否できるという「正当な要求」の因子と、自主的にものごとに取り組む「自主性」の因子の二つからなっている。13項目。自己主張と自己抑制の両方がバランスよく発達することが自己制御機能の発達である。③養護性（思いやり）：動物や植物を育てたり、自分より小さいもの、弱いものの世話をしたり面倒をみたりする特徴である。8項目。④攻撃性：活動的で行動が荒々しく、乱暴で、他の子を傷つけたりする傾向である。8項目。ここで新しく作成された自己抑制と自己主張については因子分析を行い、さらに $\alpha$ 係数を算出して尺度の信頼性を確認している。

親の養育態度 ①受容：子どものことが好きで、子どもの気持ちや行動をよく理解し、優しく受け入れるという特徴である。優しさや愛情の豊かさを示す。この反対が拒否的。②統制：子どもに口やかましく指図したり、叱ったりする傾向。③矛盾：親の態度が時と場合によってころころと変わる程度を示している。④実権：子どものしつけや教育に関して実権（リーダーシップ）を持っているのは父母どちらかを測定している。得点が高いほど評定者自身の方が実権をもっていると認知していることを示す。

## 3. 横断的データと縦断的データ

幼稚園（保育園）や家庭での幼児のようすが月日と共にどのように変化するか、半年後の子どもの変化に焦点を当てた。このような縦断的データの結果と横断的データの結果は同じかどうか。従来の研究結果（柏木、1988；森下、2001）によれば、自己抑制の側面は3～5歳と年齢が進むにつれて発達するが、自己主張の側面はあまり変化がみられなかった。これらの結果はいずれも横断的データによるものであった。しか



し、小嶋（1990）や永野（2001）が指摘するように、横断的データの結果は同一個体（あるいは同一コホート）の発達を反映しているとは限らない。また、自己制御について各年齢における変化のようすが一般に園と家庭では一致するかどうかに焦点を当てる。

分析に用いられたデータは546（男269、女277）組であった。

#### 横断的データと縦断的データの結果

幼稚園（保育園）における幼児の横断的データの分析結果から、自己抑制は男女共に年中から年長にかけて発達すると考えられた。しかし、縦断的データの分析の結果は、年少、年中時に自己抑制は発達するが、年長時には発達がみられなかった。したがって、横断的データと縦断的データの結果を総合すると、年長児の自己抑制の高さは年長時の発達ではなく、年少・年中時の発達の積み重ねによるものと考えられる。

また、自己抑制の因子レベルについて検討した結果、「頑張り」因子の横断的データは自己抑制全体の変化とは類似していなくて、自己抑制の発達は主として「我慢因子」の発達を反映しているようにみえた。しかし、縦断的なデータの分析結果から、自己抑制の発達には「我慢因子」だけではなく「頑張り」因子の発達も関与していることが明らかとなった。

このように横断的データの結果だけから結論することの危険性は、自己主張に関してもいえることであった。横断的なデータは幼児の自己主張は3歳以後は発達しないということを示していた。しかし、縦断的なデータでは3歳以降も自己主張は発達していた。つまり、横断的なデータでは一見発達していないとみえる結果であっても、縦断的なデータを基に子どもの育ちを追跡的にみた場合には自己主張の発達がみられるという結果であった。その際、自己主張の発達には「正当な要求」と「自主性」の両因子が関与していることが明らかとなった。したがって、発達という視点からは、同じ子ども（コホート）の変化に視点を当てる縦断的なデータを重視しなければならないということが改めて浮き彫りとなった。

#### 幼稚園（保育園）と家庭での子どものようす

グループデータとして、自己抑制に関して、横断的なデータの特徴は、家庭でのようすと園でのようすとほぼ一致していた。縦断的な分析の結果も園と家庭ではほぼ同じような結果であった。

自己抑制の性差について検討した結果、家庭では唯一の例外を除いてすべての場合に有意差がなかったのに対して、園では時点を問わずすべての年齢で性差があり、女子の方が男子よりも自己抑制が高かった。このような場面による行動の相違にはその社会のもつ社会的文化的な要因が影響していると考えられる。つま

り、我が国においては、女子は特に家庭以外の場において自己を強く抑制すべきだという通念が依然として影響している可能性がある。

自己主張に関して、横断的な研究の結果、男女共に年齢差がみられなかった点は家庭でも園でも同じであった。しかし、縦断的な分析では男子の自己主張の発達は家庭ではどの年齢についてもみられなかったのに対して、園ではすべての年齢で認められた。女子については、家庭でも園でも自己主張の発達が年齢を問わずほぼ同じようにみられた。なぜ、家庭において男児のみに自己主張の発達がみられないのかは検討課題である。

以上、多少の相違はあるものの、一般に園と家庭における自己制御の発達の様相はかなり類似していた。しかし、担任評定と母親評定の相関は有意ではあるがあまり高くない値であった。つまり、園と家庭での子どもの一人ひとりの特徴は必ずしも一致するとはいえないということになる。つまり、園と家庭で同じような行動特徴を示す子どももいれば、まったく異なる行動特徴を示す子どももいるということが示唆された。

#### 4. 家庭と園での子どもの行動パターン

すでに指摘されているように、子どもはさまざまな場において、そこで結ぶ人間関係を中心に生活が展開されている（Bronfenbrenner, 1979、小嶋、1999）。いうまでもなく主要な人間関係の対象は、家庭では親やきょうだいであり、園では先生や仲間である。

家庭と園という二つの異なった場面における子どもの特徴は一致するか、その特徴は発達のどのように変化するのか。また、場を越えてある程度一貫した自己制御機能がいつ頃から形成されるのか。自己抑制や自己主張の特徴が家庭と園で一致する子どもと一致しない子どもについて、養護性、攻撃性の特徴は何か、そこに家庭での母親や父親との関係がどのような影響を与えるのか。

分析に用いられたデータは1回目調査の489組（男239、女250）であった。

#### 家庭と園での子どもの特徴

男女別年齢別に家庭と園における自己抑制と自己主張のそれぞれの得点の中央値を算出し、その値より高い場合をH群、低い場合をL群と分類した。そして家庭と園での特徴を組み合わせて4群を作った。その結果、全般的に家庭と園での子どもの行動特徴は一致しないという結果であった。自己抑制と自己主張に関して、行動パターンの出現率は類似しており、家庭と園で行動が一致するパターン（HH群とLL群）はそれぞれ約30%、一致しないパターン（HL群とLH群）

はそれぞれ約20%であった。

次に、年齢の変化につれて行動パターンがどのように変化するか注目した。自己抑制に関して、年少の女子と年中の男女は家庭と園で行動が一致するパターン(HH群とLL群)の出現率が高かった。つまり比較的年少の子どもでは家庭での自己抑制の強さがそのまま園でも出現しやすいといえる。

自己主張に関して、家庭と園での行動が一致するパターンの出現率は、男子の場合は年少・年中から年長にかけて上昇していた。年長児のこの上昇の源はHH群の増加であり、女子に比較してもHH群の出現率は高いものであった。この結果は男子はより自己主張が期待されるという社会的文化的背景のなかで、後に述べるように母親の一貫した態度や期待がHH群出現率を高めているのではないか。それとは対照的に女子の場合は年少から年中・年長にかけて一致パターンの出現率は低下していた。特に年少女子に一致パターンが多いのが特徴であった。このように自己主張に関しては性差がみられたが、子どもにとって自己主張のもつ社会的文化的意味を問う必要があるだろう。

### 子どもの行動パターンと親子関係

#### 1) 自己抑制パターン

家庭でも園でも自己抑制の高い子ども(HH群)は、男子も女子も一般に養護性が高く攻撃性が低かったが、特に園場面における養護性が高いという特徴があった。このような男子の母親は受容的で矛盾が少なく、父親も受容的で実権得点が低かった。また、同じようにHH群の女子の母親は受容的で統制がゆるく、父親も受容的であった。したがって、このような受容的で矛盾の少ないおだやかな親子関係のなかで安定した自己抑制や養護性が形成され、攻撃性が抑制されると考えられる。

それとは対照的に、家庭でも園でも自己抑制の低い子ども(LL群)は、男女共に家庭でも園でも養護性が低く攻撃性が高かった。特に男子の園での攻撃性がきわめて高いという特徴があった。このような子どもの母親と父親は共に拒否的であり、さらに男子の母親は矛盾が多く、女子の母親は非常に統制的であった。したがって、母親や父親との拒否的な関係、さらに母親の矛盾の多さや統制の強さのもとで子どもは自己抑制や養護性を形成できず、親子関係から生じる強いストレスやフラストレーションが場面を越えた強い攻撃性、特に園での強い攻撃性を生じさせると考えられる。

また、自己抑制が家庭では低い園では高い女子の場合(LH群)、家庭では養護性が低く攻撃性が高いのに対して、園ではその反対に養護性が高く攻撃性が低かった。この群では母親の受容性のみが低かった。

男子HL群の母親は平均的で、父親は受容的で矛盾が少なくかつ実権をもっていた。このHL群とHH群

の大きな差異は父親の実権の強さにあった。男子はそのような強いリーダーシップをもつ父親のいる家庭では自己抑制や養護性が高く攻撃性が低い、そのような父親のいない園ではその反対に自己抑制や養護性が低く攻撃性が高いのだろうか。HL群の女子の親の特徴はHH群の親と区別がつかなかった。

#### 2) 自己主張パターン

家庭でも園でも自己主張の高い(HH群)男子は、家庭でも園でも養護性が高いという特徴があった。HH群の男子の母親は態度に矛盾が少ないという特徴があった。一貫した母親の態度が、子どもの安定した自己主張や養護性を育てているのだろう。

それとは対照的なLL群の男子は、家庭と園のいずれにおいても養護性が低いという特徴があった。その母親の特徴は矛盾が多く、父親は拒否的であった。母親の矛盾した態度や父親の拒否的な態度が相互に影響し合っって子どもの自己主張の発達を阻害していると考えられる。

家庭では自己主張が高く園では低いHL群の男子の特徴は、家庭では養護性は高い園では低いという特徴であった。自己主張が養護性の高さを規定しているようにみえる。その母親の特徴は矛盾が少なく父親は受容的で、LL群とは対照的であった。

男子LH群の特徴は園での養護性は高いが、園での攻撃性が非常に高いという特徴があった。自己主張が家庭において抑圧されている男子が、園での自己主張と共に攻撃性を高めているところにその特徴がある。LH群の母親の特徴は矛盾が多いが父親はやや受容的であった。

女子の親子関係については4群間に有差差が認められなかった。

以上、家庭と園での子どもの自己抑制、自己主張の特徴が、一貫して高い場合や低い場合は親子関係の特徴でもってある程度説明のつくことが多かった。しかし、子どもが家庭と園で異なった行動パターンを示す場合はその理由がわからないものが多かった。すでに指摘したように園での先生との関係や仲間との関係という変数を扱ってない点に大きな問題があった。園での子どもの特徴を理解するためにはそのような変数をいれる必要がある。

### 5. 親子関係のパターンと子どもの行動特徴

すでに指摘されているように、子どもの発達にとって母親だけでなく父親の影響も重要である。しかし、母親と父親の個々の影響ではなくて、母親と父親の役割や機能の両方の組合せが、子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えているかを明らかにすることが重要な課題である。ここでは園での子どもの自

己抑制や自己主張の特徴におよぼす母父子の三者関係を問題にした。

分析に用いられたデータは1回目調査の489(男239、女250)組であった。

### 受容と統制

得られた結果から次のようなことが推論された。母親と父親の受容が共に高い場合(母父受容型)は女子の自己抑制が発達し、その反対に受容が共に低い場合(母父拒否型)は女子の自己抑制が発達しない。さらに、母父拒否型の場合、男女ともに強い攻撃性が形成される可能性があった。このように、暖かい受容的な父・母・子関係のなかで、女子の自己抑制が育つ。それに対して、冷たい拒否的な父・母・子関係のなかで男女ともに攻撃性が形成される。このことは、すでに述べたように攻撃性は根底においてフラストレーションと関連している(森下、1996)。つまり、母親と父親からの冷たい拒否的な態度は、愛されたいという子どもの根源的欲求をまっこうから否定するものであり、深刻なフラストレーションを生む。

統制的態度次元については、母親の統制が強く父親の統制が弱い場合(母統制型)、男子は高い自己主張と強い攻撃性を、女子は強い攻撃性を形成する可能性がある。母親も父親も統制が弱い場合(母父非統制型)、男子の自己主張は発達しないが、女子の自己抑制が発達する。さらに、母親の統制が弱く父親の統制が強い場合(父統制型)、男子の思いやりが育たない。

このように、母親だけが厳しい(母統制型)場合は、男女共に高い攻撃性が形成される可能性があった。この場合、父親だけが厳しいときにはそのような影響がないという点から、母親と父親の役割、母-父-子の三者関係のありようや、その点についての子どもの認知が問題となる。また、両親共に統制がゆるやかな場合、女子の自己抑制を発達させる反面、男子の自己主張の発達を阻害する可能性がある。男子の場合はある程度の壁とか抵抗に出会ってはじめて自己主張の芽が形成されるのかも知れない。

### 矛盾と実権

両親ともに養育態度に矛盾の少ない場合、男子は自己抑制や自己主張が高く、攻撃性が低かった。したがって、両親共に矛盾の少ない一貫した養育態度が、特に男子の自己制御の発達に望ましい影響を与えるようだ。

両親のどちらが実権を握っているかについて、両親ともに実権をもっている場合(両親実権型)は、男子の自己抑制も自己主張もさらには思いやりも発達しない可能性があった。それに対して、母親より父親の方が実権を持っている場合(父親実権型)、男子は自己主張と思いやりがともに育つようだ。女子の場合、父

親より母親の方が実権を持っている場合(母親実権型)、自己主張が育つものに対して、母親より父親の方が実権を持っている場合(父親実権型)は思いやりが特に育たない可能性があった。

自己主張は、男子の場合は父親が実権を握っている場合に、女子の場合は母親が実権を握っている場合に育つ。ここでは、同性の親へのモデリングが生じている可能性がある。それに対して、両親がともに実権を持っていると認知している状況では、子どものしつけをめぐる葛藤が多く、それが男子の自己制御や思いやりの発達に悪い影響を与えているのではないかと。また、母親よりも父親の方が実権を握っている場合、男子では思いやりが育つものに対して、女子では特に思いやりが育たない点が注目される。このように、なぜ男女によって母親父親の態度パターンから受ける影響が異なるのだろうか。

## 6. 保育の特徴と子どもの行動特徴

ここまで、親子関係が家庭や幼稚園・保育園での子どもの自己制御等にどのような影響を与えるかについて検討してきた。その中で、特に園での子どもの特徴について、母親や父親の態度要因だけでは充分に説明できない点があるということが明らかとなった。子どもの自己制御等の発達には、親子関係をはじめとする家庭での相互作用のほかに、園における先生(保育者)と子どもとの相互作用や、園自体の特徴(例えば、教育(保育)方針の特徴)、家庭や園を取りまく地域の社会的文化的特徴などの複合的、生態学的な要因が作用しているものと考えられる(小嶋1999; Bronfenbrenner, 1979)。

各園の保育者は、その園の教育(保育)方針や伝統的文化の影響を受けていると考えられるので、園によって実際の保育の特徴が異なるものと予想される。そこで、各園の保育特徴と各園の子どもの特徴を明らかにし、両者の関連について検討した。保育特徴については、保育方針のような認知レベルではなくて、現実にはどのような保育をしているかに焦点を当てた。

### 研究の手続きと園の特徴

基本的には研究5(森下、2002b)のデータの一部と、新しく保育特徴に関する調査結果について分析した。和歌山県下の4つの幼稚園(A、C、D、E園)と1つの保育園(B園)の年中児(4歳児)と年長児(5歳児)が研究の対象となった。各園児の担任に対して、新しく、ふだんの保育の特徴について質問紙に評定を求めた。

対象となった幼稚園・保育園は、日頃から研究熱心な園で、園の案内によれば、各園の教育(保育)目標



の特徴は概略次の通りであった。

A園:対象児197名、保育者9名。園の教育目標は「生き生きとした強く明るい子ども、美しくあたたかい心の子ども、考えやり抜こうとする子どもの育成」である。

B園:対象児80、保育者6名。園の保育方針は、「強くたくましい子ども、みんなと遊べる子ども、生命を大切にす子ども、豊かで素直な感性をもった子どもの育成」であり、遊びを通して今を精一杯豊かに生きることを大切にしている。

C園:対象児94、保育者7名。「<積尊の御教えを幼なごに>を教育の理念とし、子どもたちが心身ともにのびのびと育っていくことを願い目標とする。かがやく生命、やさしい心、豊かな個性の育成をめざす。」

D園:対象児114、保育者8名。「幼児期に宗教的な情操をあたえ生命を大切に、明朗で感謝の心を忘れない、心も体も共に風雨に負けない立派な根をもつ幼児を育てる教育を目標にする」

E園:対象児28、保育者4名。「教育のこころ;子ども一人ひとりの命を輝かそう。教育のねらい;輝く笑顔、たくましく生きる力、やさしい信条、仲間とともによく視る目、よく聴く耳、よく考える頭を育てる」

### 園の保育特徴と子どもの特徴

分析の結果を要約すると、家庭での子どもの行動特徴については5園の間でほとんど差異がみられなかった。しかし、園における子どもの行動特徴には園ごとに大きな違いがあり、各園の保育特徴にも大きな差異がみられた。両者の関連を検討すると、保育特徴が園での子どもの行動特徴に影響している可能性が示唆された。つまり、安全・過程、協調性・思いやりを重視した保育特徴をもつ園の場合、子どもは男女共に自己抑制や養護性が高く、攻撃性が低かった。それに対して、冒険やたくましさを重視する園や、生活体験や子ども主導を非常に重視する園では、子どもは比較的自己抑制が低く攻撃性が高かった。ただし、それだけで冒険やたくましさ、生活体験や子ども主導を重視する保育を問題視することはできない。

結果をもう少し詳しくみてみよう。

保育特徴について改めて因子分析をおこなったところ、一応信頼性の高い5つの因子(尺度)を得た。因子内容は、それぞれ1. 数・言葉の指導重視—生活体験重視、2. 安全・過程重視—冒険・成果重視、3. 子ども主導—教師主導、4. 協調性・思いやり重視—個性・たくましさ重視、5. 男女区別—男女平等因子と命名した。これらの因子と梶田ほか(1985)の因子とを比較すると、この第2因子は梶田ほかの「成果重視—過程重視」、第3因子は「子ども中心—教師中心」、第4因子は「まとも重視—個性重視」第5因子は「男女区別—男女平等」という風に内容は部分的に対応し

ている。

各園の保育特徴と子どもの自己制御等との関連について検討した結果、次のような特徴が浮き彫りとなった。

(1) A園について、保育の特徴は、安全・過程重視と同じほど冒険・成果を重視しており、協調性・思いやりと共に個性・たくましさをも重視している。男子は養護性が低いのにに対して家庭での自己主張が高かった。女子は自己抑制と養護性が低く相対的に攻撃性が高かった。養護性が低いという男女に共通した特徴や、自己抑制が低く攻撃性がやや高い女子の特徴は、「生き生きした強く明るい子ども」の育成を教育目標とする園の特徴や、冒険やたくましさを重視するという保育者の特徴を反映した結果かも知れない。また冒険やたくましさの重視が男子の家庭での自己主張の強さに現れている可能性があった。

(2) B園の保育の特徴は、生活体験と子ども主導を非常に重視しており、安全・過程を尊重し、男女平等指導重視という点にあった。男子は自己抑制が低く攻撃性が高かった。女子は自己抑制が低く攻撃性も相対的に高かったが、養護性も高かった。男女に共通した自己抑制の低さと攻撃性の高さは、強くたくましい子どもの育成をめざす保育目標や、教師の指導よりも生活体験や子ども主導を非常に重視した保育特徴が子どもの活動性を高めることを反映しているかも知れない。また女子の養護性の高さは、保育園という場のなかで過去と現在におけるより大きな子どもやより小さな子どもとの交流経験の豊かさがプラスに働いた結果だと考えられる。

(3) C園の保育の特徴は5園のなかで全体に中間的な特徴を示しており、安全・過程重視、協調性・思いやり重視を示しているが、男女平等体験というなかで男女を区別した指導をもつという点が特徴であった。男子は園での自己抑制と養護性が高いのにに対して攻撃性が低かった。女子は自己抑制と養護性が高く攻撃性が非常に低かった。男女に共通した自己抑制や養護性の高さと攻撃性の低さは、「かがやく生命、やさしい心」を大切にす教育目標や、安全・過程重視、協調性・思いやり重視の保育特徴が影響している可能性がある。男女を区別した体験や保育方針をも取り入れるという特徴が男女にどのような影響を与えているかについては、本研究の限りでは不十分であるが、女子の攻撃性の非常な低さに反映されているかも知れない。

(4) D園の保育の特徴は、生活体験と同じほど数・言葉の指導を重視しており、さらに子ども主導のなかで教師主導をも大事にし、安全・過程や協調性・思いやりを重視している点であった。男子は自己抑制と養護性が高いのにに対して攻撃性が非常に低く、家庭での自己主張は高かった。女子は自己抑制が高く、攻撃性が非常に低かった。男女に共通した自己抑制の高さと



攻撃性の非常な低さ、男子の養護性の高さは、「生命を大切にし、感謝の心を忘れない」ことを大切にしている教育目標や、安全・過程重視、協調性・思いやり重視、教師主導を比較的重視する保育特徴を反映しているかも知れない。数・言葉の指導を比較的重視する保育が子どもにどのような影響を与えているかはこの研究の限り不明である。

(5) E園の保育の特徴は、生活体験を非常に重視しており、安全・過程重視、協調性・思いやり重視で、男女平等指導重視という点であった。男子は自己抑制が低く攻撃性が高く、家庭での自己主張は低かった。女子は自己抑制と養護性が共に高かった。女子の自己抑制の高さと養護性の高さには「やさしい信条、仲間とともに」を大切にしている教育目標や、協調性・思いやり重視の保育特徴の影響があるかも知れない。自己抑制が低く攻撃性が高いという男子の特徴には何が関与しているか不明である。

各園の教育（保育）目標や保育特徴とともに、各園の歴史的文化的背景の影響が考えられる。例えば、C園とD園の子どもたちは、全般に自己抑制と養護性が高く攻撃性が低かったが、そこには両園に共通の仏教というバックグラウンドが作用しているかもしれない。

#### 各園における親の態度の影響

各園児の特徴には家庭における親の態度の特徴が影響しているかもしれないので、その点についてチェックした。男子に対する態度は、母親に関しても父親に関しても園間には有意差がなかった。地域性が異なっているが、男子に対する母親および父親の養育態度には差異がないと考えられる。また女子に対する父親の態度には有意差がなかった。しかし、女子に対する母親の態度にのみ次のような特徴がみられた。A園の母親は矛盾した態度が比較的少なかった。B園の母親は相対的に受容が少なく矛盾が多いという特徴があった。C園の母親は受容的であった。D園の母親は全体に平均的な態度ということであった。E園の母親は矛盾が少ないという特徴があった。母親についてのこのような差異は、地域環境や生活環境が影響しているものと考えられる。これに対して、家庭での女子の特徴には有意差がみられなかった。

B園女子の特徴の内、園における自己抑制が低く攻撃性が高いという特徴には、母親が比較的受容が少なく、矛盾が多いという態度が影響しているかも知れない。またC園女子の園における特徴（自己抑制と養護性が高く、攻撃性が非常に低い）には、母親の受容的な態度が影響している可能性がある。さらに、E園女子の園における特徴（養護性が高く、攻撃性が非常に低い）には、母親の態度の矛盾の少なさが関与しているかも知れない。

#### 残された課題

梶田ほか（1985）の保育特徴に関する質問紙は、項目内容がよく吟味されたものである。項目を対にして呈示し、どちらかを選択させて保育の重点の置き所をより浮かび上がらせようとしている点に特徴がある。しかし、そこに長所と共に次のような問題点がある。

その一つはそれらの項目がはたして対になるような保育特徴であるのか、あるいは互いに両立しがたい保育であるのかということである。例えば、個性と協調性、思いやりとたくましさは対立するものかどうか。仮に思いやりの育成とたくましさの育成の両方を保育目標とする場合を考えると、両方が独立に測定できるような尺度が必要となる。また対として呈示された項目は互いに意味を限定したり特徴づけたりするから、同じ項目でも単独に呈示された項目内容とは異なるものとなる。

また保育特徴に反映されているような保育者や園全体の子どもに寄せる期待が、保育者が子どもを評定する際に働いている可能性がある。また保育特徴を評定した者と子どもの特徴を評定した者は同一の評定者だということも問題となる。このような場合、反応セットをはじめ種々の問題が作用する可能性がすでに指摘されている（小嶋、1979）。このような問題点を改善するためには第3者による観察が必要となるだろう。

保育が子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与え得るかという視点からデータを解釈してきたが、そのことを実証できたわけではない。これを実証するためには、入園当初から子どもの観察を通じて、保育者の働きかけと子どもの行動の変化との関連を分析する必要があるだろう。

#### 7. 自己制御の発達研究の展望

以上の研究に即して、いくつかの課題が残された。

(1) これまでの研究で、親子関係が子どもの年齢や性によって異なった影響を与える可能性が示唆された。また、家庭と園で行動の特徴が異なる子どもについて親子関係の要因だけでは十分に説明できなかった。したがって園における先生との関係や仲間との関係という変数をいれた研究が必要となる。

(2) 母と父と子という三者関係を問題にすることが子どもの自己制御発達の理解にとってきわめて重要であると考え、その一端を明らかにしてきた。しかし、三者のダイナミックな関係の分析にまで至っていない。そのダイナミックな関係を、どのようにアプローチし、どのような測度や指標を用いて、どのように分析するかという課題が残されている。

(3) 家族構成や家族関係をはじめとする家庭の特

徴、幼稚園・保育園の歴史的文化的特徴、それを取りまく地域の社会的文化的特徴、そのようなメソシステムが子どもの行動を特徴づけているだろう。したがってこのような生態学的な要因や要因間の関連を総合的に分析する必要がある。

以上、親子関係をはじめとする子どもの環境が子どもの自己制御の発達にどのような影響を与えるかという視点から考察してきた。しかし、すでに多くの研究で指摘されているように、子どもと環境との相互作用(transaction)、例えば親子関係の中で親の行動が子どもの行動に影響すると共に子どもの行動が親の行動に影響するという相互規定的な視点が重要である。このような相互作用の視点から新しい研究方法、分析方法を開発することが今後の重要な課題となる。

(4) 自己抑制や自己主張をめぐるその測定の問題があげられる。ここでの測度(measure)は園の担任教師や子どもの両親の評定に基づくものであった。このような測度について信頼性や因子の妥当性を確認して研究を進めてきたが、それで十分というわけではない。他方で自然な場面での行動観察や、自己抑制や自己主張が出やすい実験場面を設定しての行動観察が重要だと考える。すでにそのような研究がすすめられている(山本、2000)。

少し視野を広げると次のような点が指摘できる。

幼児の自己抑制や自己主張が養護性や攻撃性とのような関連があるかを明らかにしてきたが、それで十分ではない。例えば、いじめ、学級崩壊など今日のさまざまな問題について理解するために、自己制御機能がどのような役割を果たしているかを明らかにする必要がある。

この研究では、自己抑制や自己主張の発達や形成に対して、主として親子関係、そして保育特徴の影響に焦点を当ててきた。しかし、すでにふれてきたように自己制御機能の形成には個人のさまざまな体験や経験、生態学的な環境が影響していると考えられる。したがってそのような要因やメカニズムを明らかにしていく課題が残されている。このような課題を明らかにすることによって、今日の子どもの問題行動の解決に寄与するばかりでなく、生涯を通じての人間の生き方に寄与するのではないかと考えている。

(付記) 本研究を進めるに当たり、幼稚園や保育園の園長先生をはじめ、先生方、保護者の方々、園児の皆さんのご協力を得ました。心から感謝いたします。

## 引用文献

東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会  
Bandura, A. 1971 *Social Learning Theory*. General

Learning Corpolation (原野広太郎・福島修美訳 1974 人間行動の形成と自己制御—新しい社会的学習理論— 金子書房)

Bandura, A. 1977 *Social Learning Theory*. Prentice-Hall, Inc. (原野広太郎監訳、1979 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎— 金子書房)

Bronfenbrenner, U. 1979 *The Ecology of Human Development — Experiment by Nature and Design* (磯貝芳郎・福富護 訳 1996 人間発達の生態学 川島書店)

春木 豊 1986 行動的セルフコントロールの諸理論 心理学評論、**29**, 46 — 67.

Hoffman, M. L. 1963 Parent discipline and the child's consideration for others. *Child Development*, **34**, 573 — 588.

Hoffman, M. L. 1970 Moral development. In Mussen, P. H. (Ed.) *Carmichael's manual of child psychology (Vol.2)*. New York: Wiley.

石田勢津子 1986 自己評価のセルフコントロール 心理学評論、**29**, 27 — 43.

梶田正巳・後藤宗理・吉田直子 1985 保育者の「個人レベルの指導論(PPT)」の研究—幼稚園と保育園の特徴— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—、**32**, 173-200.

柏木恵子 1986 自己制御(self-regulation)の発達 心理学評論、**29**, 3 — 24.

柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会

小嶋秀夫 1979 親子関係の心理(二)—親子関係の意義の研究— 児童心理、**33**, 1126 — 1143.

小嶋秀夫 1987 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科、**33**, 1 — 24.

小嶋秀夫 1987 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(2) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科、**34**, 189 — 217.

小嶋秀夫 1988 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和62年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書

小嶋秀夫 1990 発達研究の方法 無藤隆・高橋恵子・田島信元(編) 発達心理学入門II pp.189 — 206. 東京大学出版会

小嶋秀夫編著 1999 人間発達と心理学 金子書房

小嶋秀夫・内山伊知郎・宮川充司 1988 家族関係調査(FRI)手引き<暫定版> 名古屋大学教育学部教育心理学科教室 **62**, 54 — 57.

森下正康 1991 第II章母子関係 松田星(編)新・児童心理学講座12巻 家族関係と子ども Pp.31 — 72.

森下正康 1996 子どもの社会的行動の形成に関する

研究 風間書房

- 森下正康 1998 子どもの生きる力を育てる 第46  
回日本教育医学会発表論文集
- 森下正康 2000a 幼児期の自己制御機能の発達(1)  
— 思いやり、攻撃性、親子関係との関連 — 和歌  
山大学教育学部紀要(教育科学)、**50**, 9 – 24.
- 森下正康 2000b 幼児期の自己制御機能の発達(2)  
— 親子関係と幼稚園での子どもの特徴 — 和歌山  
大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、**10**,  
117 – 128.
- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)  
— 父親と母親の態度パターンが幼児にどのような  
影響を与えるか — 和歌山大学教育学部教育実践  
総合センター紀要, **11**, 87 – 100.
- 森下正康 2002a 幼児期の自己制御機能の発達(4)  
— 園と家庭における縦断的研究 — 和歌山大学  
教育学部紀要(教育科学)、**52**, 1 – 12..
- 森下正康 2002b 幼児期の自己制御機能の発達(5)  
— 親子関係が家庭と園での子どもの行動パターン  
におよぼす影響 — 和歌山大学教育学部教育実践  
総合センター紀要, **12**, 47 – 62.
- 森下正康 2003 幼児期の自己制御機能の発達(6)  
— 保育の特徴と子どもの行動特徴 — 和歌山大  
学教育学部紀要(教育科学)、**53**, 23 – 38.
- 永野重史 2001 発達とは何か 東京大学出版会
- 鈴木眞雄・松田 星・永田忠夫・植村勝彦 1985 子  
どものパーソナリティ発達に影響をおよぼす養育  
態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度  
構成 愛知教育大学研究報告(教育科学)、**34**, 139  
– 152.
- 庄司一子 1996 幼児・児童の self-control の発  
達とその規定要因に関する研究 風間書房
- 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張—自  
己抑制 発達臨床心理学研究、**7**, 77 – 86.
- 塚本伸一 1988 児童の自己統制に関する研究—  
TSCRS 日本版の検討(1) — 日本教育心理学会第  
30回大会発表論文集、396 – 397.
- 矢川晶子 1999 児童期の自己制御の発達およびその  
関連要因について — 不安・コンピテンス・学習  
行動との関連性 和歌山大学大学院学校教育専攻  
修士論文(未刊)
- 山本有香 2000 幼児の相互作用における協調的行動  
の発達と意義 和歌山大学大学院学校教育専攻修  
士論文(未刊)